

# 里山文化論

里山文化を探る

日時：平成20年11月23日（日） 10:00～12:00

講師：中野 加都子（神戸山手大学教授）

## 概況



### 里山文化を探る

#### ■日本とドイツの比較の観点から見る日本の自然観

カレンダーの風景をみると日本とドイツの自然観がわかる。ドイツでは管理された幾何学的な庭園が好まれる一方で、日本では人工物が介入しない自然を活かした庭園が好まれる。これは、ドイツでは地震や台風のような人間の力ではどうしようもない自然現象が少ないため、自然は人間が管理するものという考え方があり、日本では人間も自然の一部であり、ありのままの自然を大切にするという考え方があるためである。

#### ■植物の循環に依存した日本の文化

日本の伝統的な道具は再生する植物が主原料であり、日本は植物の循環に依存した文化であるといえる。また、日本人が神として崇拝してきた対象は生態や環境の象徴（八百万の神）であり、元来エコロジカルな文化である。

#### ■産業革命前後のヨーロッパの事情および同時代の日本人の選択

中世ヨーロッパでは人口増加に伴う木材の消費過多や、森を牧草地にした結果、森が激減しペストや飢餓が流行した。そういった木質資源の減少を背景として、石炭が使用されるようになり産業革命が起こった。一方日本では、二次林の資源をうまく水田農業に使う農業体系を確立しており、里山の資源を食いつぶすことなく、再生を図りながら循環利用していた。

#### ■植物の循環を基本とした日本型環境保全と創造

西欧と日本の根本にある価値観・文化は異なるが、持続可能な循環型社会の形成という最終目標は一致している。化石資源が枯渇しつつある現在、植物資源への依存という日本発の価値観、方法が見直されるべきである。その象徴が里山保全である。日本の伝統的な植物国家としてやりくりする知恵、「枠内」で生きる知恵がバイオマス利用・カーボンニュートラル実現の鍵であるだろう。

#### ■ローカルな環境保全活動の積み重ねとしての地球環境

植物の生存環境を維持することと、次々と生み出される生産活動に対する枠内での人間活動、この二つがローカルな環境保全活動の柱となる。例えば工業製品の分野ではグローバルスタンダードが大切であるが、一方で地域の文化を守り、太陽エネルギー、水系の仕組み、光合成による生産能力を巧みに利用するなど、地域の特性に合わせてローカルスタンダードによる対策の積み重ねで全体としての環境負荷が削減されるという視点も大変重要である。